

お盆は、忙しい

鈴木 浩明

毎年のことですが、お盆は、大変忙しくなります。

8月11日 若獅子神社と産業開発青年隊記念碑の周辺美化作業を行いました。若獅子神社に志、同じくする、5名の有志が集結し、若獅子の塔、帰還戦車、若獅子神社境内、周辺を美化しました。産業開発青年隊記念碑の周辺も、同じく、美化を行いました。特に、産業開発青年隊の由緒と、長澤先生の産業開発青年隊に贈られた言葉「富士の如く、美しく、雄大に、尊厳なれ。」が書かれた赤茶色の巨大な碑を、23年ぶりに清掃をしました。コケがつき、黒くなりつつある、碑を見て、どうしても、きれいにしたくなりました。タオルでこすると、すぐにタオルが黒くなり、すすいだ水も真っ黒になります。23年分のコケの手ごわさを、痛感いたしました。若獅子神社も、自衛隊のOBの方や、若獅子神社に関係する方々が、草刈りをしてくださるのですが、境内の周りの砂利が敷かれているところは、いつも、手付かずとなっており、8月15日終戦記念日のみたま祭の間に合うように、草刈りをします。

なぜ、私たち産業開発青年隊の有志が、清掃作業を続けているかといえば、それは、志をもって、私たちを教育してくださった恩師がおりました。その方は、陸軍戦車兵学校3期卒業生でした。中国大陆を転戦され、終戦後、復員しようとしたましたが、蒋介石率いる国民党の捕虜となり、捕獲接收された武器類、特に車輛（戦車・自動車等）の操縦・整備教育指導を行なうこととなりました。その後、帰国を許され、郷里の宮崎に帰りました。

県の職員として、誰にも組み立てることのできなかった、GHQ払い下げのブルドーザーを組立て、その後、九州の建設省のモータープールで、九州産業開発青年隊の指導教育を行いました。そして、昭和38年静岡県立東高等学校の移転に伴う造成工事で、富士宮に呼ばれ、昭和59年の建設省退官そして、その後、産業開発青年隊の教育を受託していた、社団法人に入会され、産業開発青年隊の教育指導を閉校まで、続けられました。その後は、若獅子神社の、守り人として、命が尽きるまで行動されました。晩年、私が、産業開発青年隊同窓会の役員として、ご一緒させていただく時期があり、今までのお話を聞く機会がありました。先生は、軍人として生きてこられた方であり、戦前の教育勅語によって教育を受けられてきた方です。また、日本という国に対して、誇りを持たれていました。

日本国民として、どのような生き方をしなければならないかを、多くの人々に伝えられました。晩年、施設にご夫婦で入居され、亡くなる直前には、「皆さんに迷惑をおかけして、本当に申し訳ない。」とたびたびお話をされました。私が思うのに、戦車兵学校も敗戦と共に解体され、自分の生きた証が亡くなってしまいました。その後、産業開発青年隊の教官として、今後の日本国を託す、若人たちに指導教育を行う機会を与えられましたが、これも閉校となってしまいました。そして、ご自身の生きた証であり、亡くなられた、英霊を祭る神聖な場所を守られてきましたが、最後に力尽き、若獅子神社の存続を、自分の手で、成し遂げることができなかった心の叫びが、「皆さんに迷惑をおかけして、本当に申し訳ない。」とい

う一言になったのではないかと考えます。若獅子神社に対して、様々な思惑があり自分の夢のために活動されている方もいるかもしれません。帰還戦車がなぜ、多くの方々にあのような姿をあらわしているのか。それは、戦争に行ったひとでしかわからないことではないかと思います。

戦争の、痛ましさ、もう戦争はするものではないという、体験した方にしかわからない思があるはずです。朽ち果てていくその姿から、2度と戦争をしてはいけないという覚悟を伝えるために、あの場所に佇んでいるはずです。私たちは、その思いを理解して、後世に伝える努力をしていかなければならないはずです。

先生、私は、思います。先生の生きた証は、確実に受け継がれています。8月16日柚野興徳寺の施餓鬼法要、投げ松明にも参加させていただき、産業開発青年隊の先輩である松永泰然住職の、仏教の本髄である、人間としての生きざま（人生哲学）を伝えるための実践がなされています。これも、先生の残した大切な宝だと思います。

いつも、お盆は、せわしく過ぎてきます。しかし、先生との約束を果たすために、自分なりに精一杯、努めさせていただいています。先生に笑われないように、精進させていただきたいと思います。これが、私の忙しいお盆の過ごし方です。



若獅子神社帰還戦車の前で、草刈り



若獅子神社境内の草刈り



富士教育訓練センター青年隊記念碑 二十数年ぶりの記念碑清掃



川施餓鬼法要点火式



川施餓鬼 火収めの読経